外国人理科系研究者に求められる日本語

―短期研修の受け入れ側研究者の意識調査の結果―

金久保　紀子

要　旨

年々増加傾向にある短期滞在型の理科系研究者のために必要な日本語を知る目的で、受け入れ側である日本人研究者へアンケート調査を行った結果を会話に焦点を当てて分析し、報告する。調査の結果、研究者間のよりよい関係を築くための日本語の意義が重視されていること、外国人研究者にはそういう日本語の意識がないこと、あいさつを超えた日常的に使われる日本語が望まれていること、研究活動での日本語の必要性は必ずしも高くないこと、外国人研究者の日本語レベルにより意識に差があることが明らかになった。これにより研究者対象の日本語研修のシラバス作成に必要な情報が得られた。

【キーワード】　短期滞在理科系研究者　日本人研究者　会話教育　シラバス

Japanese for Foreign Researchers: a report based on a survey conducted with Japanese researchers

Kanakubo, Noriko

A survey for Japanese researchers was conducted for the purpose of getting basic information about Japanese language learning for short-stay foreign researchers. The focus of this paper was Japanese conversation. The analysis made it clear that speaking Japanese, especially daily conversation in an research institute is desirable in order to construct better relationships with Japanese researchers though foreign researcher are not conscious of it. Speaking Japanese is not always necessary for research. Ideas about Japanese study differ according to the level of Japanese ability. The results will help to make effective syllabus for Japanese training for foreign researchers.

1．はじめに

日本語教育において多様な学習者に対応するため、さまざま教育の在り方が模索されている。それぞれの学習者に必要な日本語のコース、教材といったことは検討されつつあるが、実際に何を、どう教えればいいのかといった教育の面は最近ようやく手がつけられつつあるというのが実状であろう。

このような状況の中、留学生の専門分野別の教育については、専門語や講義の聴解、専門科目教官との協同、論文の読解といった面から多角的な研究がなされ（石田研（1992）、五味（1996）、加納（1993）など）、学習者別の研究の中では一番進んでいる。これらの研究は、各大学の留学生センターなどが中心になって進められるといった利点があるためであると思われる。

一方、「一般外国人学習者」はどうであろうか。「一般外国人学習者」としてくくられる学習者にも、さまざまな違いがあることは見逃せない。国際日本語普及協会（1990）が行ったアンケート調査によると、被調査者346人の内訳は表１のとおりであった。

表１　AJALT（1990）の被調査者の内訳

職　種	%
ビジネスマン	47.1
教　師	19.9
主　婦	8.7
研究者	4.0
その他	20.3

この内訳に呼応するように、ビジネス関係者についての研究は、「一般外国人学習者」の中では比較的進んでいる。最近では主にビジネスコミュニケーションという観点から研究がなされている（西尾、1995、清、1995）。清（1995）では、上級ビジネスマンに焦点を当て、彼らの日本語会話の困難点を探り、従来の教育への提言を行っている。

その他の「一般外国人学習者」については詳しい研究、検討はほとんどなされておらず、従来の「一般」というイメージを引きずったままの状態である。

本稿では内訳では一番少なかった研究者に焦点を当てる。その理由は、研究者がビジネス関係者同様、独自の日本語使用の環境を持ち、また多くの場合、日本語の使用を必ずしも必要としていないという特殊な条件を持っているからである。日本語を必ず使用しなければ仕事（研究者の場合は研究）が進まないという状況にないとき、日本語はその環境でどのように機能しているのか、という問題は、外国人による日本語使用の広がりを考えた場合、重要な視点であると考える。

また、つくば市には各省庁の研究機関が集中し、長期短期を問わず、各国からの理科系研究者が

常に滞在している。つくば市以外のさまざまな研究機関にも今では必ずと言っていいほど外国人研究者はいる。研究機関の中には機関で独自の日本語教育の場を設け、外国人研究者に提供しているところもある。しかし、それらの多くは彼らが理科系の研究者であるということを考慮せずに「一般外国人学習者」という枠の中での教育を余儀なくされている。あるいは日本語教師の経験的な知識に頼って、必要であろうと思われる情報を提供している。

理科系研究者のための日本語教育では、読解教育などで、留学生のための教育と重なる面が多いと考えられる。ただし留学生よりも短期間に効率よく、という点に重点が置かれることは予想できる（加納、1993)。しかし、読解教育は1) 日本語教師の力だけでは十分にできないこと、2) CAIなどによる教育が効果的であること、3) さらに細分化された専門分野別の教育が必要であること、などの理由により、十分な教育環境をもたない現場では重点的に取り上げるのが難しい面も否めない。

一方、会話の面はほとんど未知の分野である。研究活動において日本語を話すことがどのように必要なのか、あるいは理科系外国人研究者は日本語を話す必要があるのか、などの点はいっこうに明らかにされていない。

筆者は1991年から1994年までの４年間、短期滞在の外国人研究者の日本語研修に関わった（金久保・十島、1994)。その際、研修のシラバス作成において具体的な資料の乏しさ、また学習者が求めている日本語と教えている日本語とのギャップを感じた。

本稿は、外国人理科系研究者（以下外国人研究者）がどのような日本語を学習する必要があるのか、という問題を知るために、まず彼らがどのような日本人と日本語を使用し、日々接している日本人研究者は彼らにどのような日本語を求めているのか、という点を会話教育という観点から調査・分析を行い、彼らの日本語学習に有益な基礎的な資料を得ることを目的とする。

２．調査の目的と概要

今回のアンケート調査は以下のように行われた。対象者はいずれも金久保・十島（1994）に報告されている1993年度 Summer Institute（米国若手研究者訪日研修：以下SI）において、米国の大学院生を研究者として受けれた日本人研究者、および同じ研究室に在籍している研究者である。

時期：1993年８月～９月　　(SIの日本語研修終了直後)

対象：つくば市内および東京、東京近郊にある国立・民間の研究所の研究員43名

男　性：42名　　女　性：１名

年齢層：30代～50代

回収方法：SIの主催者である科学技術庁の職員を通して、書面にて依頼し、郵送、ファックス等で科学技術庁側が回収

SIにおいて初級、初上級、中級というレベル分けがあり、今回の被調査者もそのレベル別に分析を行った。それぞれの内訳は初級（以下レベル１）26名、初上級（以下レベル２）10名、中級（以下レベル３）７名であった。

本調査の第一の目的は、外国人研究者に接する日本人研究者はどのような人たちで、外国人研究者の日本語にどのようなイメージを持っているかを大まかに知ることである。今回のアンケート調査には以下のような特徴がある。

1) ほとんどの設問において日本人研究者は特定の外国人研究者を想定していること
（米国人、大学院生、短期研修など）
2) 科学技術庁を後ろ盾にした調査で、回収率が非常に高かったこと
3) 長時間かかる調査は不可能で、５段階評価の調査しかできなかったこと

この調査の結果を補足するために、同SIの外国人研究者を対象に、研究所における自身の日本語の使用状況のアンケート調査を実施した。

こちらの方の概要は以下の通りである。

時期：1993年８月～９月
対象：1993年度SIに参加した米国大学院生で、日本語研修において初級のコースを修了した13名
回収方法：筆者が口頭で説明し、配布した後、手渡し・郵送で回収

以上の二つの調査を重ね合わせることにより、短期滞在の外国人研究者が使用する日本語、使用してほしい日本語などの情報がより明らかになるはずである。

３、結果

アンケートを作製するに当たり、どのような日本語の場面分けが適当であるか、日本人研究者にわかりやすいかを考え、1) あいさつ、2) 研究所での日常生活、3) 研究活動の３分類を設定した。1) は研究所で会ったときに「おはようございます」をいう程度を想定している。2) は研究活動に関係のない場での日本語、たとえば食事の時間、休み時間などでの日本語である。この分類にしたがって以下に結果を示す。

３．１　日本人研究者の英語環境

研究所での英語環境を知るため、研究活動と日常生活における使用の頻度と必要性について聞いた。その結果を表２に示す。ただし表中の数字は、５段階評価の得点で、得点が高い方が評価が高

いことを表している。

表2　日本人研究者の英語環境

研究活動		日常生活	
使用	必要性	使用	必要性
3.8	4.7	2.7	3.4

また約60％の日本人研究者は主に英語圏に留学した経験を持っている。以上から、日本人研究者は英語の使用に大きな抵抗を感じていないことがわかる。当然、外国人研究者と英語で研究活動、あるいは研究所での日常の生活をしていることが窺える。

3．2　外国人研究者の日本語使用への評価

前節により明らかになった英語の使用が困難でない研究所という環境で、日本人研究者が、外国人研究者が使っている日本語をどのように評価しているのかを調べた。

質問した項目は、具体的な表現を使用しているかどうかを問う形式だった。図1にその結果を示す。結果は5段階評価で、数字が大きい方が頻度が高いことを示している。

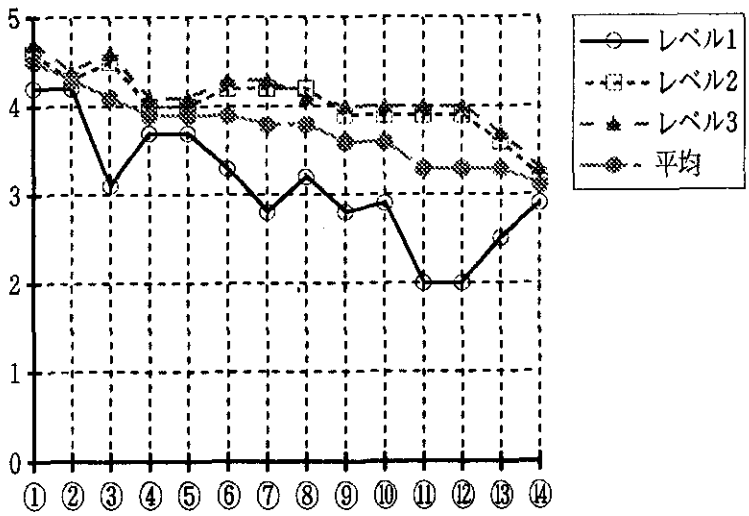

図1　日本人研究者による外国人研究者の日本語の使用状況評価

①おはよう系　②さようなら系　③簡単な相槌　④呼びかけのすみません　⑤じゃあまた系　⑥はじめまして　⑦短い返事　⑧食べ物の感想（おいしかった等）　⑨ありがとう系　⑩謝罪のすみません　⑪スケジュールの話　⑫食べるときのあいさつ　⑬経験の感想（おもしろい等）　⑭話しかけのあのー系

同様に外国人研究者に自分が使用している日本語についての質問を行った。その結果を図2に示す。こちらの方は具体的な表現を示し、それをどの程度使っているかを問う質問であった。

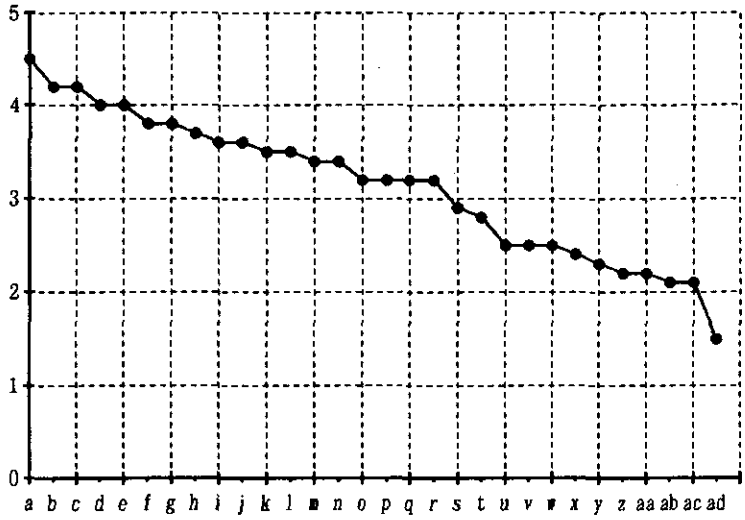

図2　初級の外国人研究者による日本語使用状況評価

a:こんにちは　b:呼びかけのすみません　c:はい　d:おはよう　e:どうも　f:どうぞ　g:ありがとう　h:行きます　i:謝罪のすみません　j:食べます　k:お願いします　l:どうぞよろしく　m:はい、そうです　n:見ます　o:さようなら　p:そうですか　q:どこ　r:はじめまして s:こんばんは　t:おいしい　u:失礼します　v:じゃあまた　w:ええ　x:あのー　y:だれ　z:いつ　aa:何時　ab:ごめんなさい　ac:いただきます　ad:きれい

日本人研究者はどの表現についても概ね頻繁に使用していると判断しており、当然の結果であるが、ほぼどの表現においても外国人研究者の日本語のレベルが高い方が評価が高い。日常頻繁に使うあいさつ、特に時間に左右されるもの、あるいは帰るときのものの使用は日本人、外国人ともに評価が高く、似た傾向を示している。外国人研究者は初級であったため、簡単な動詞、形容詞、疑問詞の使用はあまり高くない。しかし、あいさつの中で、場面に左右されるもの、たとえば食事のあいさつなどはあまり使用されていない。

レベル別に評価が分かれたことから、外国人研究者は日本語のレベルに応じて日本語使用が異なること、日本人研究者がそのレベル差を認識していることがわかる。

次に外国人研究者の日本語使用をどのように感じたかについて質問した。外国人研究者の日本語

使用は好ましかったか、熱心であったか、もっと使用してほしかったかという３つの項目の結果を表３に示す。結果はレベル別、およびあいさつ程度、日常生活程度、研究活動別に出した。表中の数字は５段階評価の得点である。得点が高い方がその項目について強くそう思うことを示している。

表３　外国人研究者の日本語使用への感想

	好　感			熱心さ			希　望		
Level	挨拶	日常	研究	挨拶	日常	研究	挨拶	日常	研究
L１	3.9	3.6	2.7	4.1	3.5	2.4	2.7	2.5	1.7
L２	4.4	4.0	3.6	4.7	4.3	2.6	2.7	2.4	2.1
L３	4.3	4.0	4.0	4.7	4.6	4.0	2.9	2.6	2.0
平均	4.2	3.9	3.4	4.5	4.1	2.9	2.7	2.5	1.9

やはりレベル別に評価が分かれる傾向を示している。あいさつの使用に関しては好感度は概ね高く、レベル３では研究活動における使用の好感度も高い。またあいさつは熱心に使用していたと評価している。しかし日常生活、研究活動になるとレベルに応じて外国人研究者も熱心ではないと判断している。もっと使用してほしかったという項目では前の項目と矛盾する結果は出なかったものの、あいさつ、日常生活、研究活動という順に希望が高い。

以上から日本人研究者は、外国人研究者は日常生活、研究活動ともに日本語使用に熱心でなくてもよいと判断している傾向があることが明らかになった。これは研究所では英語が不可欠であるという前節の結果と関係しているであろう。

３．３　外国人研究者の日本語会話力の必要性

外国人研究者一般について、日本語を話せることは何に必要であるかという質問を行った。その結果を表４に示す。

表４　外国人研究者の日本語会話力の必要性

項　　目	平　　均	有 意 差
研究に必要	2.7	t検定
人間関係作りに必要	3.6	$t=2.6$　$p<.01$

日本人研究者は、外国人研究者による日本語の使用の効用を、明らかに研究と人間関係作りを分けて考えていることがわかった。日本語の会話力は人間関係作りにこそ必要であるが、研究には必

要を必ずしも感じていない。

そこで、日本人研究者の専門分野で日本語を話せることと、論文を読めることのメリットについて質問をした。その結果、論文を読めることの方のメリットが平均4.1、日本語を話せることのメリットの平均が2.7で、読めることのメリットの方が大きいことが統計的に有意であった。($t=14.4$、$p<.01$)

以上から、日本人研究者は、研究所での話す日本語は、よりよい人間関係作りにこそ必要であるが、研究活動には直接結びつくものではないと考えていることがわかる。

さらに一般に外国人研究者が日本語を勉強する好ましさについての質問を行った。それはどの程度までの日本語学習が好ましいか、という内容であった。その結果を図3に示す。

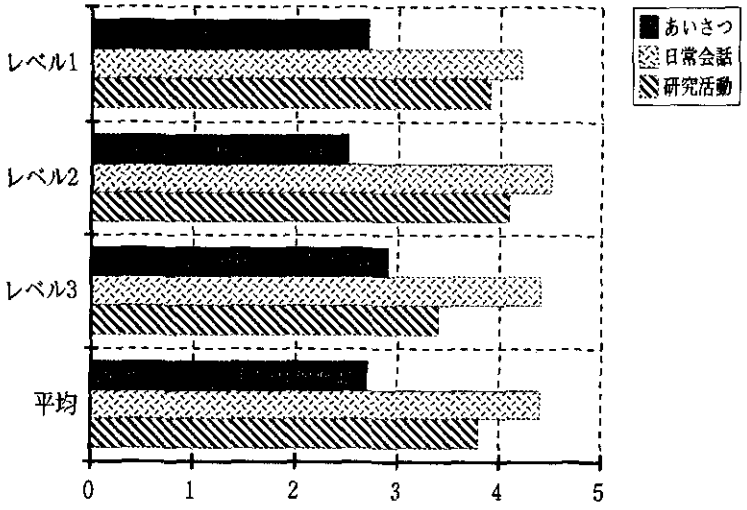

図3　外国人研究者の日本語学習の必要性

図3からあいさつ程度までの学習ではなく、研究所での日常会話程度を適当であると考えていることが明らかになった。あいさつ程度ができるのは当然であって、もう少し上の段階まで学習すべきであると考えているようである。研究活動ではどのレベルの外国人研究者を持つ日本人研究者も日常会話ほどは必要であると考えていない。

レベル3で、極端に両者に差があるのが特徴である。この結果と表3の結果を総合的に考えると、研究活動でも熱心に日本語を使おうとしている外国人研究者に対し、実は日本人研究者はそれほど努力する必要を認めていないことが予想される。なぜ研究活動ができる程度の日本語が必要であると思うかという理由を自由に記述してもらう箇所では、日本人研究者には「研究を進める上でのスピードアップ」という理由を挙げる方が多かった。

以上から、実際に日本語が上級レベルである外国人研究者でも研究活動で「スピードアップ」で

きるほどの日本語を習得するのは難しいと感じた日本人研究者は徐々に日本語学習の必要性を低くみる傾向があると考えられる。

この結果を補足するために、レベル１の外国人研究者に日本語を話すことの必要性等についての意識を調査した。その結果を下に示す。各々の数値は平均値で、数値が高い方が強くそう思うことを表している。

表５　外国人研究者による日本語使用の意識

	あいさつ程度の日本語を話す必要がある	4.6
必	日常会話程度の　　〃	2.9
要	研究活動で　　〃	2.3
性	日本語を使うことは研究所でのよりよい人間関係に必要	3.6
	今の段階で理科系に特別な日本語の必要性を感じる	2.1
	＜条件が許せば＞	
意	あいさつ程度の日本語を研究所で使用したい	4.8
	日常会話程度の　　〃	4.6
欲	研究活動で　　〃	3.1
	＜自分（外国人研究者）の日本語は＞	
評	研究所でのコミュニケーションに十分であった	2.2
	研究所で日本をの使用に不便を感じた	3.6
	＜担当の日本人研究者は＞	
	自分の日本語に満足していた	2.8
	あいさつ程度の日本語をつかってほしいと思っていた	4.4
価	日常会話程度の　　〃	4.4
	研究活動で　　〃	2.7

外国人研究者の方はあいさつ、日常生活で日本語を使用したいという意欲はあるものの、必要性の項はあいさつ以外は平均値が高くない。また自分の日本語についてコミュニケーションには不十分であったが、強く不便であったとは考えていない。さらに日本語を話すことが研究所でよりよい人間関係を築くことに必要であると積極的に考えていない。また担当の日本人研究者の自分の日本語力への評価も高くないであろうと予測している。

全体を見ると、自分の日本語力には満足しておらず、研究活動まで日本語でしたいという気はないものの、日本語を学習することには決して消極的ではない。しかし、研究所での環境は、必ずしも日本語を使用する必要がないことがわかったため、その意欲を生かす努力はあまりしていないのではないだろうか。英語に不自由しない環境では、よりよい人間関係のための日本語使用、という

意識も低くなってしまっていると考えられる。

3.4　外国人の日本語に対する姿勢

調査全体を見るために、受け入れている外国人研究者の日本語のレベルごとに日本人研究者を分け、全質問項目に因子分析を行い、13の因子を得た。表6により寄与率の高い因子1から3を取り上げて分析する。バリマックス回転後の因子負荷量から各因子と関連の強い項目を抽出した。その結果を表7にレベル別に示す。

表6　各因子の寄与率

	レベル1		レベル2		レベル3	
因子	固有値	寄与率	固有値	寄与率	固有値	寄与率
1	6.8	24.2	10.7	38.4	11.6	41.6
2	3.9	14.0	6.8	24.9	5.8	20.8
3	2.6	9.4	3.4	12.1	3.8	13.7

表7　各因子と関連の深い項目

【レベル1】

＜因子1＞	内容	負荷量
	日常生活でどの程度日本語を使用していたか	0.86
	日常生活で熱心に日本語を使用していたか	0.85
	あいさつで熱心に日本語を使用していたか	0.77
	あいさつでどの程度日本語を使用していたか	0.71
	日常生活で日本語を使用する必要があるか	0.70
＜因子2＞		
	自分の分野で日本語が話せるメリットはあるか	-0.84
	研究活動ができるまで日本語を学習するべきか	-0.82
	日本語を話すことは研究活動で必須である	-0.77
＜因子3＞		
	研究活動でどの程度日本語を使用していたか	-0.71

【レベル２】

＜因子１＞ 内容	負荷量
短期研修の外国人は	
研究活動で日本語が必要である	0.87
日本語を話すことは研究活動で必須である	0.87
日本語を話すことは	
よい人間関係のために必須である	0.86
自分の分野で日本語が話せるメリットはあるか	0.86
研究活動でもっと日本語を使ってほしかった	0.85
短期研修の外国人は	
日常生活で日本語が必要である	0.85
短期研修の外国人は	
日常生活で日本語が必要である	0.85
日常生活でもっと日本語を使ってほしかった	0.80
研究活動ができるまで日本語を学習するべきか	0.77
研究活動で熱心に日本語を使用していたか	0.77
あいさつでもっと日本語を使用してほしかった	0.70
＜因子２＞	
あいさつで熱心に日本語を使用していたか	0.98
自分のあいさつ程度の日本語を理解していたか	0.93
日常生活で熱心に日本語を使用していたか	0.90
日常生活で熱心に日本語を使用していたか	0.90
短期研修の外国人は	
あいさつで日本語が必要である	0.87
あいさつでどの程度日本語を使用していたか	0.82
＜因子３＞	
外国人研究者の日本語につきあう余裕があるか	0.88
研究と日本語学習との関係	0.84

【レベル３】

＜因子１＞ 内容	負荷量
あいさつでどの程度日本語を使用していたか	1.00
自分の研究活動での日本語を理解していたか	0.95
短期研修の外国人は	
日常生活で日本語が必要である	0.86

短期研修の外国人は

研究活動で日本語が必要である	0.85
あいさつでどの程度日本語を使用していたか	0.84
研究活動で熱心に日本語を使用していたか	0.83
＜因子２＞	
自分の分野で日本語が話せるメリットはあるか	-0.92
日本語教育に興味があるか	-0.76
日本語教育に積極的に関わってみたいか	-0.75
＜因子３＞	
自分のあいさつ程度の日本語を理解していたか	-0.92
日常生活でもっと日本語を使ってほしかった	-0.91
あいさつでもっと日本語を使ってほしかった	-0.86
あいさつ程度の日本語学習が必要である	-0.82
日常生活程度の日本語学習が必要である	-0.81

以上から受け入れている外国人研究者の日本語のレベルごとに日本人研究者の日本語への姿勢に差があることがわかった。レベル１では、まず因子１で日本語を使用することに着目し、日常生活、あいさつなどでどう使用し、どう熱心であったかがポイントとなっている。因子２では日本語の学習に観点が移り、特に高いレベルの日本語学習が必要であるかどうか、という点が注目されている。次にレベル２では因子１で非常に多岐にわたる項目が取り上げられ、外国人研究者の日本語学習が研究所での生活と切り離されたものではないと思っている様子が窺われる。因子２では何をどの程度理解していたか、使用していたかという点が注目され、因子３では日本人研究者自身と日本語教育、学習との関係が重要な項目となっている。レベル３では、あいさつと研究活動での日本語が因子１で注目されている。これは矛盾しているようにも見えるが、よい関係のためのあいさつ、研究のための高いレベルの日本語という外国人研究者が使用する日本語の二つの側面を認識していると考えられる[1]。因子２で自身と日本語教育、学習との関係が、因子３であいさつ・日常生活での日本語が注目されている。

以上のレベル別の変化から、外国人研究者の日本語使用の状況により、日本人研究者が影響を受け、日本語の使用・学習に対する姿勢の変化が見られることが明らかになった。このことは日本人研究者に日本語教育・日本語学習の様子などの情報を与えることにより、外国人研究者の日本語環境が変化する可能性を示唆していると考えられる。

4　まとめと提言

前節において、調査の結果から見える研究所での日本語使用の実態について、主に話す日本語の使用という観点から考察した。まとめると、以下の点が明らかになった。

＜日本人研究者＞

・外国人研究者が日本語を使うことに肯定的ではあるが必須ではない。

・研究所での日本語の使用はよりよい人間関係を築く上で重要である。

・研究所での日常生活に必要な日本語を身につけてほしい。

・あいさつ程度の日本語力はあって当然である。

・研究活動は英語ですればよいので、日本語は十分な日本語力があればよいが、そうでないなら無理にする必要はない。

・日本語を話せることより論文が読めることの方がメリットが大きい。

・外国人研究者の日本語のレベルにより態度が変化している。

＜外国人研究者＞

・日本語を話すことはよいよい人間関係に必ずしも必要ではない。

・あいさつ、日常会話程度の日本語を研究所で使用したい。

・研究活動を日本語で行う必要はない。

・専門のための特別な日本語教育の必要性は感じない。

全体的に見ると、日本人研究者は日本語を研究所での生活に不可欠なものではなく、あくまで付録的に道具的にあればいいものと捉えている。迅速かつ合理的な研究活動が第一義である環境を考えれば仕方がないことであろう。一方、双方ともに持っている日本語使用への積極性が、互いに伝わっていないように見受けられる。特に日本人研究者側には外国人研究者がどんな日本語を使えるはずか、あるいは使いたがっているのか、といった情報が未だに十分に流れていない様子が窺える。

気をつけなければならない点は、日本人研究者は外国人による日本語の使用をよい関係、コミュニケーションのために重要であると捉えているのに対し、外国人研究者の方は必ずしもそうは思っていないことである。この意識の差に注意しなければ、なくてもよい摩擦を生む可能性があると考えられる。

また、繰返し必要性が確認された研究所での日常生活で使用される日本語がどんなものであるのかは、早急に調べられなければならない。研究所で何か特殊な話題、特別に学習する必要がある文法、機能があるのか、あるいは特殊なものはなく、一般的な日常会話で十分なのか、は研究者対象の日本語研修には必要な情報であろう。

以上の結果を踏まえて、外国人研究者のための日本語研修では次のような点に留意すべきであると考える。

・研究所で遭遇する研究活動以外の場面での日本語を積極的に取り上げる

・あいさつを基本とする簡単な日本語の重要性を強調し、意識して使うように指導する

・時間的に左右されるあいさつだけでなく、さまざまな場面・状況で現れるあいさつ表現を指

導する

・受け入れ側にも日本語学習に関する情報をできるだけ流す、できれば日本語教育の場に参加してもらうなどの工夫をする

今まで、あまり知ることができなかった外国人研究者の研究所での日本語使用の一端を観察できたことは意義があったと考える。調査結果によると、日本語教育に全く関心のない日本人研究者は少なく、むしろどんなことが教えられているのかに興味を持ってくれているようである。

一方、研究者はビジネスマンとは異なり、日本語で問題を解決する必要性はあまりないらしい。研究上の問題は英語で解決できるので、むしろ問題解決をスムーズに行うための道具としての日本語を強調し、日本語を使用したいという外国人研究者の意欲に沿った日本語教育を行う必要がある。

今後は、研究所での日本語の具体的な例の収集・分析を通して、より詳細な資料をそろえる必要性が高い。一方、英語を自由に使える環境であるという結果であったが、その英語はどのような英語であるのかを調べることにも、日本人との円滑なコミュニケーションという観点から意義がある[(2)]。

今回の調査は英語圏の外国人研究者を受け入れた日本人研究者を対象とした。今後は他地域の外国人研究者の場合、民間の小さな研究所の場合、長期の滞在者の場合、などさまざまな外国人研究者の状況を考える必要がある。さらに日本人研究者が円滑な人間関係に日本語が必要だと強く感じる場面、表現を調査することも、効率の良さを要求される短期滞在研究者のための日本語研修では必要なことであろう。

注

(1)「よりよい人間関係のために日本語が必要である」という項目はこの因子で負荷量が0.65であった。

(2)金久保（1993）をポスター発表した際の名古屋大学尾崎明人先生のご教示による。

参考文献

1．海保博之編（1985）『心理・教育データの解析法10講基礎編』福村出版

2．石田敏子研究室（1992）『講義の日本語における理科系・文化系の特徴　』報告集

3．金久保紀子（1993）「短期研修における外国人理科系研究者の日本語使用 ― 受け入れ側の意識調査の中間報告 ―」『日本語教育方法研究会誌』1-2:14-15

4．金久保紀子・十島真理（1994）「Summer Institute における短期日本語研修 ― 経験の浅い日本語インストラクターと SItuational Functional Japanese の使用」『日本語教育論集』筑波大学留学生センター 9:169-183

5．加納千恵子（1993）『外国人研究者の科学・技術日本語読解能力を養成するための効率的な教

材・方法の開発』文部省科研費研究成果報告書
6．国際日本語普及協会（1990）『一般外国人に対する日本語教育の実態に関する調査研究報告書』平成元年度文化庁日本語教育研究委嘱
7．五味政信（1996）「専門日本語教育のおけるチームティーチング―科学技術日本語教育での日本語教員と専門科目教員による協同の試み―」『日本語教育』89：1-12
8．清　ルミ（1995）「上級日本語ビジネスピープルのビジネスコミュニケーション上の支障点―インタビュー調査から教授内容を探る―」『日本語教育』87：139-152
9．西尾珪子（1995）「ビジネス関係者への日本語教育―現状と展望―」『日本語教育』86別冊：108-118

謝辞

本稿をまとめるにあたり、協力してくださった元科学技術庁国際課の堀口彰一氏、元科学技術国際交流センターの三田和夫氏、国立・民間研究所の日本人研究者の方々、SIに参加した方々に深く感謝申し上げる。また調査の段階で手伝ってくださった韓国釜慶大学の十島真理氏、データの整理をしてくれた筑波大学日本語・日本文化学類の高丸典子さんに、心から感謝の意を表したい。

資料

Summer Institute 参加研究員の研究所における日本語使用に関する調査

金久保紀子　筑波大学文芸・言語研究科４年
十島　真理　　同　　２年

この調査の目的は、サマー・インスティテュートのプログラムで来日したアメリカ人大学院生が研究所において、どのような日本語をどの程度使用したか、またそのことに関してホストの方、同室・同僚の方々が、どのように感じたかを知ることにあります。

外国人研究者がますます増加している今日、日本語教育界においても、科学技術分野における特別な日本語教育の必要性が高まってきています。しかしながら、研究所の方々の協力を得ることが難しく、実際に研究所側の意見をお聞きするということは、ほとんど行われていないのが実態です。

今回の調査の結果は、今後のサマー・インスティテュート、及び他の外国人研究者のための短期日本語研修に大きく貢献するものと考えております。

どうぞ、皆様のご理解とご協力を頂けますようお願い申しあげます。

なお、ホストの方はもとより、より学生に関わった多くの方のご協力を賜りたく、数冊を同封いたしました。何卒ご高配のほど、よろしくお願いいたします。

＜調査の方法＞

次ページ以下の、各設問にお答えください。

本調査用紙は、４つのパートに分かれています。

1．協力者のみなさんについて
2．サマー・インスティテュートの学生の日本語使用の実態について
3．学生の日本語使用に関するご意見について
4．外国人研究者一般に関するご意見について

≪協力者のみなさんについて≫

1．研究所名　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2．性別　　男　　女

3．年齢　　10代　20代　30代　40代　50代　60代

4．学生とのご関係　　ホスト　同僚（同じ研究室　それ以外）
その他（なるべく詳しく）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5．学生との接触頻度　　週に＿＿＿回＿＿計＿＿＿時間くらい

6．学生の名前（差し支えなければお願いします）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

7．留学のご経験　　ある　国名＿＿＿＿＿＿期間＿＿＿＿＿＿＿＿＿
　　ない

8．ご自身の英語の使用頻度はいかがですか。(以下の設問では適当な箇所に○を)
　＜日常生活＞　よく使う　かなり使う　まあまあ　あまり使わない　使わない
　＜研　　究＞　よく使う　かなり使う　まあまあ　あまり使わない　使わない

9．ご自身は英語の必要性について、どう思われますか。
　＜日常生活＞　とても必要　必要　ときどき　あまり必要でない　まったく必要でない
　＜研　　究＞　とても必要　必要　ときどき　あまり必要でない　まったく必要でない

10. ご自身の部屋を共同で使用していますか？　　はい　　いいえ

11. ご自身の部屋に外国人研究者がいますか？　　はい　　いいえ

≪学生の日本語使用について≫

以下の各設問は、日本語が使用されうる状況を示したものです。各設問について、学生が日本語を使用したかどうか、適当なものにアルファベットをご記入ください。

A: いつも使う　B: よく使う　C: ときどき　D: ほとんど使わない　E: 一度も使わない

1．一日の始まり（おはようございます、など）＿＿＿＿＿＿
2．その日の研究のスケジュールに関する話（今日は何をするんすか）＿＿＿＿＿＿
3．研究について
　・話題の提示（あのー××のことですがー）＿＿＿＿＿＿
　・短い返事など（はい、あ、そうですか、いいえ）＿＿＿＿＿＿
　・あいづち（へー、はあー）＿＿＿＿＿＿
4．昼休みや休憩時間に世間話
　・食べるとき（いただきます、ごちそうさま）＿＿＿＿＿＿

・食べたものの感想（おいしかった、）＿＿＿＿＿＿

・自分の経験への感想（おもしろかった、たのしかった）＿＿＿＿＿＿

5．何かを使いたい、話しかけるときゅ（すみません、等々）＿＿＿＿＿＿

6．謝意を表するとき

（ありがとうございます、どうも）＿＿＿＿＿＿

7．謝罪をするとき

（すみません、ごめんなさい）＿＿＿＿＿＿

8．挨拶

・自己紹介（はじめまして、どうぞよろしく）＿＿＿＿＿＿

・帰るとき（では、お先に、じゃあまた）＿＿＿＿＿＿

・米国に帰るとき（お世話になりました、さようなら）＿＿＿＿＿＿

≪学生の日本語使用に関するご意見≫

次の設問についてどうお考えですか。下記のアルファベットから、適当なものをお選び下さい。

A: 強くそう思う　B: そう思う　C: わからない　D: そう思わない　E: 全くそう思わない

1．SI のような短期研修の外国人は日本語を使う必要がない

・研究の場面で

・日常会話の場面で

・あいさつ程度で

2．今年の研究員の日本語の使い方は好ましかった

・研究の場面で

・日常会話の場面で

・あいさつ程度で

3．ご自身の日本語を研究員はよく理解していた

・研究の場面で

・日常会話の場面で

・あいさつ程度で

4．研究員にできればもっと日本語を使ってほしかった

・研究の場面で

・日常会話の場面で

・あいさつ程度で

5．研究員は熱心に日本語を使おうとしていた

・研究の場面で

・日常会話の場面で

・あいさつ程度で

6．研究員がゆっくりと日本語を話すのにつきあう時間的余裕はない

7．SIの研究員には日本語を学習するよりも、研究の方が大切である

（午前中日本語研修で時間をとられるのは、好ましくない）

8．研究員とご自身との関係はうまくいっていた

≪外国人研究者一般に関するご意見≫

次の設問についてどうお考えですか。下記のアルファベットから、適当なものをお選び下さい。

A:強くそう思う　B:そう思う　C:わからない　D:そう思わない　E:全くそう思わない

また一部の設問については、その理由もできればお書き下さい。

1．一般的に外国人研究員が少しでも日本語を話せることは、

・研究に必須である

・よりよい研究のための人間関係造りに必須である

・研究にも人間関係造りにも必要ない

2．ご自身の研究分野において、外国人研究者が

・日本語を話せることのメリットは大きい

・日本語の論文を読めることのメリットは大きい

3．今後もSIのような短期外国人研究者の受け入れを続けたい

4．外国人研究者が日本語を勉強することは好ましい

・研究の話ができる程度

理由（　　）

・日常会話ができる程度

理由（　　）

・挨拶ができる程度

理由（　　）

5．外国人研究者に対する日本語の教育について

・興味がある

・積極的に関わってみたい

6．最後に今年のSIの学生について、個人的にどう思われますか。

7．その他、コメントなどありましたら、是非お願いします。

長い時間、ご協力ありがとうございました。